

二強^て一サガ₂

N E W S A G A

阿部正行

Abe Masayuki

Main Characters
主な登場人物

カイル

主人公の魔法剣士。一度魔王を倒したが、真紅の宝石の力で過去に戻り、再び冒険を始める。

カイルの幼馴染で、女の子に目がないムードメーカー。

セラン

ウルザ

美しきエルフの精霊使い。カイルの村を訪れ、なほ崩的に仲間になる。

ミランダ

ジルグスの大使としてカランに派遣された、優秀な女性官僚。

ゴウ

12歳ながら魔法の道具を作り出す“魔技師”として働く天才少年。

リーゼ

おさなしみ
カイルの幼馴染。格闘の才能があり、その腕前はかなりのもの。

シルドニア

マジックキング
伝説の『魔法王』が自分の人格や知識の一部を複写した魔剣の精神体。

魔族

人族の仇敵。魔王の命を受け、鉾山都市カランに忍び寄る。

ガザス

カランに住む、職人肌のドワーフ鍛冶師。

ジルグス王国の王都、マラッド。

二十万人近い人^{じんぞく}族が住むこの都市は、大陸全土でも有数の大都市で、常時賑^{にぎ}わっている。だがその賑^{にぎ}わいもこしばらくの間、影を潜めていた。

「やっぱり影響^{えいぎやう}つもあるもんだな。俺の印象^{いんさう}じゃ、王冠^{おうかん}かぶってなければただのおっさんのようにしか見えなかったんだが」

窓際^{まどぎは}で頬杖^{ほぢぢ}をつき、普段より人影^{じんえい}がまばらな通りの様子を見てぼやいているのは、セラんだ。

あの勲章授与^{しゆんしやうじゆ}式から、つまりレモナス国王^{こわい}が亡くなってから十日が経っている。カイル達はその間、マラッドでも有数の宿に滞在^{たいてん}していた。

国王^{こわい}の死の二日後には大々的に国葬^{こくさう}が執^とり行われ、今はマラッド全体^{しんたい}が喪^もに服^{ふく}していた。

スーラ聖^{せい}王^{おう}国^{こく}の聖^{せい}王^{おう}のように信仰^{しんぎやう}されているわけでも、ガルガン帝国^{ていこく}の皇帝^{ていおう}のようにカリスマ性を帯びているわけでもない、凡庸^{ぼんよう}な王^{おう}と言^いわれていたレモナス王^{おう}。しかし国民^{こくみん}からはそれなりに慕^{した}

われていたようだ。

劇場なども演目を中止し、いつもなら大道芸人が自慢の芸を披露している大広場も静かで、ただ吟遊詩人だけが王を悼む詩をもの悲しげに詠っている。

「特に大きな失策もない王だったからな、国民にはそれで充分だったんだよ」

そう答えたのは、ベッドに仰向けに寝転びながら自分で作った冊子を見ているカイルだった。

カイルからしてみれば、あんな王のためにご苦労なことだと、内心苦笑いではあったが。

王の突然の死は、ジルグス国に少なからず混乱をもたらした。

またそのあまりに急な死と、直前に起きたミレーナ王女とカレナス王子への魔獣襲撃を結びつけ、他国の陰謀や国内の反抗勢力の示威行為、果ては魔族の仕業ではないかなど、様々な噂がまことしやかに流れていた。

だがそれも全て噂の域を出なかった。この静けさもあくまで一時的なものだ。事実、自粛モードも次第に薄れつつあり、新たな期待がマラッドに、そしてジルグス国全体に漂い始めている。

「しかしあれだよな、こう言っちゃなんだが、もうちょっと時期を考えて欲しかったぜ。よりによって授与式の夜だもんな、おかげでこっちの影が薄いこと」

セランがまたぼやくように言う。

カイル達は危機に陥った王女を助け、その功績を称えられて勲章を授けられた。

この手の話題が庶民は大好きで、本来なら今頃世間はその話で持ちきりだっただろうが、国王の急死の前にかなりかすんでしまっている。

カイルの目的が英雄になること、知名度を上げることである以上、これは不運だったとセランは嘆いているのだ。

「……逆に考える、もし亡くなるのが一日でも早かったら、間違いなく授与式は延期、もしかしたら中止になっていたかもしれない。待ってくれた、そう思えば感謝するしかないだろ」

自分で王を暗殺しておいて、我ながら白々しいな、と思いつつカイルが言った。

「おお、なるほど。そう言われれば確かにそうだな」

「それに実績としてはちゃんと残っているし、もう少し経ったら吟遊詩人でも雇うさ」

吟遊詩人は自ら作った詩や物語だけでなく、依頼されて作った詩も広める。

かなりストリートな売名行為だが、貴族がお抱えの剣闘士を称えたり、冒険者が冒険の成功を宣伝したりするためのこうした依頼は、珍しいことではなかった。

無論、大なり小なり脚色された出来になるのだが。

「なるほど……ならいつそのこと劇団でも雇って、劇場で派手に公演でもさせるか？」

セランは冗談のつもりだったのだが、カイルはそれを聞くと冊子を閉じ、真剣な顔で悩み始めた。「それもありだな……とはいえまだエピソードが足りないか。将来的には考えてもいいな」

「……あ、俺もなるべく格好良い役で頼むぞ」

「前向きに検討しよう」

セランはどう考えてもお笑い要員だということは、あえて言わないカイルだった。

「で、これからどうするんだ？」

「そうだな、やはりジルグスを離れようとは思っている」

セランの問いに即答するカイル。

「ほう、じゃあどの国に行くんだ？」

「……それが問題なんだよな」

カイルは閉じた冊子をちらりと見て、ため息をついた。

その冊子にはカイルが覚えている限りのこれから起きること、つまり未来のことが書き込まれている。

ジルグスから出国するというのは、ずっと前に決めていたことだ。

今から約三年後に起こる魔族による『大侵攻』によって、人族は壊滅寸前にまで追い込まれる。

それに対抗するため、『大侵攻』までに人族の間で影響力を持ち、抵抗勢力をまとめるというのが、今のカイルの目的だ。

ジルグスにおいては、国の中枢との繋がりを一応は確保できた。とりあえずの足がかりにはなり

そうだし、今のところはこれでいい。

このまま留^{とど}まって更に国内で功績をあげることも考えたが、それではジルグスだけの英雄になってしまうので、新たな地へ行きたいのだ。

問題は行き先だった。

さすがにそう都合よくミレーナ王女襲撃のような、解決することで注目を集められる事件が起きるわけでもない。

できれば有力な権力者や影響力を持つ人と縁を作っていきたいのだが、今のカイル達に関わることでできて、それでいて名声を得られそうな出来事はしばらく無いはずだった。

どこか大きな国で盗賊討伐や魔獣退治でもして地道に名をあげていくかな、と考えていると、賑やかな話し声とともに部屋のドアが開かれる。

「ただいまー」

買い物に出かけていたリーゼとウルザ、シルドニアが戻ってきたのだ。

「おかえり、街の様子はようだった？」

「うーん、やっぱりまだ全体的に活気が無いわね……ただ国葬の時よりかは元に戻りつつある、って感じかな？」

カイルの問いに、大量に買い込んだ食料品を整理しながら、リーゼが答える。

街で買った保存食は味気なくてイヤだとシルドニアが言うので、手作りするらしい。

「屋台も数が少なくてつまらんのう。もう少し種類があってもよいものを」

ゆでたイモや肉の串焼き、一口サイズのパンなど様々な戦利品を持ったシルドニアが言う。

「相変わらずよく食べるな」

「千年以上何も食べておらなかったからのう、いくら食べても足りん」

彼女は魔法王国ザールレスがあらゆる術の粋を集めて生み出した魔法生命体である。本来あと千年、二千年食べなくても問題ないのだが、カイルもそこら辺は突っ込まなかった。

「そう言えばフロントに伝言があつたぞ、武器の修理は明日には終わって、店に届くそうだ」
エルフのウルザがそう報告する。

彼女だけは、特に何かを買ってきた様子は無い。

マラッドにはもう十日も滞在しているので、既に買いたいものは無く、今回は付き合いで出かけたのだろう。

「そうか、思ったより早かったな……受け取ったら出発するか」

カイル達がこのマラッドに留まっていたのは、傷んだ武器の修理のためだった。

何十人と斬ったセランの剣はもとより、特にカイルの鎧はドラゴンレザーを加工した特殊なもので、修理にも時間がかかったのだ。

また魔石や魔法薬といった消耗品を補給したかったのだが、カイル達が使用するのは希少なものでばかりだったので、これらが新たに入荷されるのにも時間を要した。

無論カイル達もその間遊んでいたわけではなく、剣や魔法の修業、各国の情勢等の情報収集を行っていた。情報を集めるという点では、やはりここマラッドのような大都市は都合が良かった。

「ただどこに行くかを決めかねていてな、もし意見があつたら言ってほしいんだが……」

旅慣れたウルザにカイルが意見を求めようとした時、ノックの音が聞こえ、それに返答する前にドアが開かれる。

「失礼する」

その言葉と共に入ってきたのは、スラリとした長身を白銀のプレートメイルに包み、胸には近衛騎士であることを示す竜の紋章をつけた女性——ジルグス王国近衛騎士第五隊長にしてミレーナ王女の側近、キルレンだった。

「全員そろっているようですね、これは都合が良かった。ミレーナ様が皆様にお会いしたいのとこのです、宮殿まで来て頂きたい」

キルレンは驚いているカイル達の反応を意に介すそぶりもなく、淡々と話し始める。

「え？ いやその……今はお忙しいのでは？」

明らかに乗り気ではなさそうなカイル。

カイルとしては、できれば今は王女に会いたくなかった。もちろんその理由は、誰にも話すわけにはいかないが。

「確かにその通りですが、これは非公式ながら王命と想っていたいただきたい。そして私が直接出向いたことが、あなた方を高く評価していることの証あかしと思ってください」

丁寧だが、反論は絶対に許さないと言わんばかりのキルレンの口調。

都合が良いと言ったが、恐らく全員そろうのを見計らっていたのだらう、とカイルは悟った。

「えっと、どういったご用件なのでしょう？ 我々は明日マラッドを出発しようと思っていたのですが」

「私も用件は聞いていません。それほど時間はかからない……と思います、多分。表に馬車を待たせているので、準備が出来次第宮殿に向かいます。お急ぎを」

有無うむを言わせない迫力のある物言いに、カイルはもう一日早く出発すればよかったかな、と思いつつ、しぶしぶ従うことにした。

急逝きいせいした王に代わり、国王に即位するのは、『ジルグスの至宝』と言われ、国民から絶大な支持を得ているミレーナ王女である。

ただ、どうやらミレーナ王女は自らが若輩じやくはいであるのを理由に、しばらくは今の身分のままで政務

を執り、時期を見て女王に即位するとの噂がたっている。

すると、王の座はしばらく空位となる。

僅かな期間とはいえ王制の国で王座が空位となるのは色々問題があるのだが、後継者が健在であり、いずれ即位するのがわかっているので、大きな混乱は無いようだ。

恐らくミレーナ王女は、最も効果的なタイミングを選んで即位する気なのだろう。

そんな強したかなミレーナ王女に、カイル達はこれから会いに行くのだ。

宮殿に着き、キルレンと別れた後、カイル達は王族専用エリアにある客間に通された。

そこで、カイル達は不相応とも言えるほどの歓待を受ける。

だがしばらく待ってもミレーナ王女が来る気配は無く、来客の世話をする侍従が申し訳なさそうに「もうしばらくお待ちを」と繰り返し返す。

更にしばらく経った後、ようやくミレーナ王女が先ほど別れたキルレンを従えてやってきた。

「皆様、急にお呼び立てした上、お待たせして申し訳ありませんでした」

そう言っって頭を下げる次期女王。人を惹ひきつける光を――上に立つ者にとって大事なものを生まれ持ったような女性だ。

だがカイルはその光に、ほんの僅かだけ陰かげりが見えたような気がした。



「ミレーナ様、どうか我々のような者に頭を下げないでください」

なるべく目を合わさないまま、カイルも頭を下げて、慌てたように言う。

「いえ、私は皆様のことを友人と思っております。これは友人を待たせたお詫びと思ってください……できればゆっくりお話ししたいところですが、申し訳ありません。すぐに用件に入らせていただきます」

ミレーナが立ち上がっているカイル達に席を勧める。当然ながら、歓談するために呼び出した訳ではないようだ。

「まず最初に言っておきますが、これは皆さんへのお願い……と言いますか、依頼のようなものです。全てをお聞きになった後で判断していただき、その上で断っていただいても大丈夫ですので、ご安心ください」

「はあ……わかりました」

いや聞いたら絶対断りにくいだろう、とカイルは心の中で呟く。

「……これは私の婚姻に係る話です」

ミレーナ王女はそう話を切り出した。

「婚姻……ですか？」

「ええ、私もつい先日知ったのですが、どうやら私には婚約者がいたようなのです」

ミレーナ王女は今年で十六歳、縁談の話があってもおかしくは無い。

だが王族の婚姻は、国政であり外交でもある。ましてや次期女王の相手となればいずれ王配おうはいとなる訳で、国全体に大きな影響を与えることになる。

王配を国内から選ぶか、それとも国外から迎えるかを決めるだけで激しい議論となるだろうし、まして決まれば大きな噂となる。

だがそれが既に決まっているというのだ。

「えっと……相手を聞いてもよろしいですか？」

「はい、ガルガン帝国第三皇子の、マイザー・レング・ガルガン殿下です」

「ガルガン帝国!？」

そのあまりにも予想外な相手に、カイルだけでなく、セラン達も驚いた顔になる。

ガルガン帝国は現在人族最大の勢力を誇る国家で、今も領土を広げようと画策している。そしてガルガン帝国とジルグス王国の仲は、はつきり言って険悪だった。

常に領土拡大を狙っている若い国家の帝国と、伝統がありどちらかといえば保守的な気風のジルグス。両国が二年前にとある一箇所を挟んで隣接することとなった時などは、その場所を巡って戦争寸前にまでなったのだ。

その場所とは、カランという名の都市国家だ。

「話は二年前の、カランを巡る領土紛争にさかのぼります」

ミレーナ王女が事の説明に入った。

カランは元々、ジルグスの南東に位置する都市国家だった。

ドワーフ族が多く住む鉱山都市であるカランからは、良質な金属類が多く産出される。また現在この大陸で唯一、魔法金属のミスリルを採掘・加工できる技術を持っていた。

この小さな都市を押さえることは、経済的にも軍事的にも大きな意味を持つ。昔から多くの国が狙ってきたが、山間部にあるカランは大軍で攻めることが難しい。

守りやすく攻めにくい地形と、城塞とも言うべき都市の防御力によって、カランは長い間独立を守ってきた。

だが二年前、支配地域の拡大でカランと隣接することになったガルガン帝国は、当然のように従属を迫り、カランもまた当然これを拒否した。

帝国も色々譲歩したが交渉は決裂、ついに戦争を仕掛けた。

カラン側は攻めにくい地形に優秀なドワーフの戦士団や傭兵を配置して固めており、いずれ帝国が根をあげるものと見ていた。

しかし帝国の有する、人族領全域でも名高い騎士団、強力な魔道兵器や大魔道士^{アークメイジ}の投入、そしてかつてない上空からの攻撃は、カランの予想を遥かに上回っていた。

完全に戦力を読み違え、このままでは占領されると判断したカランは、ジルグスに助けを要請した。見返りは、ジルグスの従属都市国家となること。

帝国は無抵抗で従った相手ならば手厚く保護するが、戦って併呑^{へいどん}した相手には容赦ない弾圧を加え、富を搾^{しぼ}り取る。

降伏して帝国の傘下に入っても、それまでのような自由な商業活動はできなくなるため、対等の付き合いをしてきたジルグスに泣きついたのだ。

従属国になってしまえばほとんど臣下と変わらないが、一応の独立は保てる。ジルグスとしても、カランが完全にガルガン帝国の支配下に入ってしまうと、喉元に刃物を突きつけられる形となるため、カランの申し出を受けたのだった。

こうして、ジルグス王国とガルガン帝国はカランを挟んで、一触即発の状態となった。

人族で最大の勢力を誇るガルガン帝国ではあるが、ジルグスも大陸有数の大国。正面からの戦争となれば、互いに大きな被害が出ただろう。

その全面戦争は寸前で避けられ、結局ガルガン帝国は撤退した。

しかも帝国はカランと不可侵の条約を結び、更には戦争を仕掛けたことへの賠償金まで支払うという、明らかに帝国側が折れた形での決着だった。

「その時に交わされた密約が、私とマイザー殿下との婚約だったようです」

レモナス王はごく一部の側近にだけこのことを伝え、当のミレーナ王女には知らせていなかった。まるで話す必要など無いかのように。

そこまで聞いたカイルは、そういうことかと心の中で呟いた。

表向きは帝国側が大きく譲歩した形になっているが、その代わりにガルガン帝国の皇帝の血筋をジルグスの王配として迎えると決まっていたなら、話は別だ。

これにより帝国はジルグス国中枢に影響力を持つことができるし、後々を考えればジルグス侵略への大義名分にもなりうる。

これではたとえカランを従属都市にしたとしても、ジルグスからすれば割に合わない。つまり、

裏を返してみればジルグス側が譲歩した形になっていたという訳だ。

だが、もし正式に婚姻を発表する前に、ミレーナ王女が死亡したら？

当然ながら、この話はお流れとなる。

帝国は次の相手、つまりカレナス王子との婚姻を要求するだろうが、すぐに見合った姫を用意できるはずもない。

何ならカレナス王子には正式な婚約者がいるということにしてもいいし、なんらかの理由つけて廃嫡はいちやくにしてもいい——レモナス王は恐らくそう考えていたのだろう。

(中々えげつないことを考える……ここでも王女の死を利用しようとしていたようだな)

それぐらいでなければ一国の王は務まらないということだろうか。

「それでこの婚姻を、正式に断ろうと思っております。数日後には帝国の使者が来る予定ですので、その場で……」

そう説明するミレーナ王女に、カイルが矢継ぎ早に問う。

「断るのですか？　しかしそうなりますとカランはどうするのです？」

「もちろんカランはそのままジルグスの従属都市国家とします。婚姻とカランの処遇は、表向きは何の関係ありませんし、婚姻の件もまだ正式な書類は交わされておりませんでした。事情が変わったから、と断っても、何ら問題はありません」

要するに全て先王が勝手に決めたことと、とぼけるつもりなのだ。

当然帝国側からすれば、納得できるものではないだろう。

「カランの長にこれを説明し、同調してほしいと考えております。皆様には、その使者になっていただくのです」

これから用意する書状を届けてほしい、それがミレーナ王女の依頼だった。

「聞きたいことがあります……なぜ我々でなければいけないのでしょうか？」

カイルの疑問は当然のものだった。

単純な使者ならば宮廷内の誰かでもいいはず。手紙を届けるだけならなおさらだ。

「まず、今ジルグスはかなり混乱の最中にあります。そして私が完全に信頼をおける方というのはまだ少ないのです」

つまり単純に人手不足、とミレーナ王女は言う。

あと何年かかけて行はずだった王位の継承計画が前倒しになり、準備も心構えも無い状態。

カランの件も重要ではあるが、それよりも重要な国内の安定と完全な掌握のために、人手が足りないのだ。

「また、ガルガン帝国の出兵も警戒する必要があるでしょう」

ジルグス内部に干渉するための計画が失敗に終わったとなると、必ず次の手を早急に打ってくるはず、とミレーナ王女は続ける。

「現状でジルグスに手出しはしてこないでしょう。そしてカランと帝国は不可侵の条約を結んでいますので、直接の武力に訴えることも今のところは無いはず……ですが何らかの、それも強引な手を使ってくるのは間違いありません」

つまり使者に直接的な危険の可能性がある、と暗に言っているのだ。

「そして私自身はその可能性は低いと思いますが……この間のあれが、もしかしたら帝国が関与しているのではないかと疑っている者もありますので」

「この間のあれ」とはミレーナ王女の暗殺未遂のことだ。

「あれ？ でも帝国って結婚で影響力を伸ばそうとしてるんですよ？ だとしたらそれは矛盾してるんじゃない……」

暗殺なんてしたら台無しじゃないですか、とリーゼが疑問を口にするが、ミレーナ王女は首を振って、帝国も一枚岩ではないと説明する。

「領土拡大という目的は同じでも、戦争による拡大を望んでいる派閥にとつては、婚姻のような外交で影響力を伸ばそうとする派閥はむしろ邪魔です。何でしたら私を暗殺して、帝国側の関与の証拠をわざと残します。それでジルグスが帝国に抗議した場合は、『そのようなことは事実無根で濡

れ衣、侮辱とも言える言いがかりだ』と反論し、逆に宣戦布告の口実にすることもできます」

「メチャクチャな話だな……」

人間のあまりのあさましさに、呆れたようにウルザが言う。

「ええ、さすがにそのような恥知らずな真似はそうそうできませんが、いざとなればやりかねない相手だと備えておく心構えは必要です」

ミレーナ王女が軽いため息をつく。

十分に信頼でき、降りかかる火の粉を振り払えるほど腕が立ち、なおかつ機動力を持っているカイル達はこの任にうってつけと言えた。

また、もし本当に帝国が絡んでいるとなれば、下手な者に行かせるとあの醜聞が明るみ出る可能性があると、ミレーナ王女は危惧していた。つまりカイル達が暗殺未遂の内情を知っているというのも、選ばれた理由の一つだった。

「もしお受けいただけるのであれば、明日中には発つていただかなければなりません。急で申し訳ありませんが、明日の朝までにお決めくださるようお願い致します」

部屋を用意させますのでお泊りください、とだけ言うと、ミレーナ王女は周りの侍女に急かされるように部屋から出て行った。

その夜、カイルは宮殿内に用意された客室のベッドで寝転びながら考えていた。

あの後皆で話し合ったが、積極的に受ける理由も断固として断る理由も無いので、最終的な判断はリーダーのカイルに任せる、という結論になった。

「とは言ってもなあ……受けない訳にもいかないか」

そもそも、ミレーナ王女直々の依頼を断るという選択肢はほぼありえない。

ミレーナ王女当人は断っても構わないと言ったが、周りの者からは王女の期待と信頼を裏切ったと思われるだろう。

ジルグスは位置的にも国力的にも『大侵攻』の際に重要な勢力の一つとなる。この国からの信頼を失くす訳にはいかない。

手柄を立てることができないのなら、それに越したことも無い。

またカランの長に会えるというのは、カイルにとって意味のあることだった。

カランにはとても腕のいいドワーフの鍛冶職人が多く、その名工達によって作られた武具は前の人生の最後の戦いで大いに役に立った。

現在のカイル達はミスリルをはじめとする多くの魔法金属を所持しているが、それだけでは意味が無い。

そうした金属を加工し武具にできるのは、カランのドワーフ達だけなのだ。それを考えれば、今

回の依頼はいい機会かもしれない。

「気は乗らないが……悪くはないか」

問題があるとすれば、ガルガン帝国の動きだろう。

王女暗殺未遂事件に帝国が関わっていないと、カイルは確信している……というよりそうだと知っている。

だが帝国がこの機に乗じてカランに何らかの手出しをするというのも、充分考えられることだった。

カイルには人族最大の国力を持つガルガン帝国と敵対するつもりはない。むしろ今後のことを考えたら、何かしらの繋がりが欲しいくらいだ。

「帝国が乗り出してきたとしたら……対応が難しいな」

大きくため息をつく。

そして何より気が引けるのは——カイルが今、ミレーナ王女となるべく距離をおきたいという心情的なものだった。

仕方のないことだった。ミレーナ王女の命を救う意味もあった。それでも、カイルがミレーナ王女の実の父親を殺したことには変わりない。

どんな顔をして会話すればいいのか、わからないのだ。

「……最近悩んでばかりだな、俺」

『頭を使うのはよいことじゃぞ』

カイルが枕に顔をうずめて唸っていると、ベッドの傍らに置いた剣、シルドニアから声がかかる。少女の姿の幻影であるシルドニアは、今頃別に用意された部屋で寝ている。あまり離れた距離に幻影を作り出すことはできないが、同じ建物内なら問題ない。

『これは推測じゃが、カランという都市では帝国相手だけでなく、何か他の問題が起きている可能性があるぞ』

「どういことだ？」

『妙だとは思わんか？ 隣接した本国の王が死んで十日経つというのに、従属都市国家の長が王都を訪ねて来んというのは？』

「それは……確かに不自然だな」

現在このマラッドには国王の弔問のために、地方領主など普段は王都にいない臣下が、国中から集まってきている。

従属都市国家の扱いは臣下とほぼ変わらない。その長が来ていないなど、通常ではありえない。

『そのことについて王女が説明しなかったのがいい証拠じゃ、カランで何らかの異常が起こっており、それについて調べるか、もしくは解決すること。恐らく妾達には、いやお主にはそこら辺も期

待しておるのじゃろう。もしかしたら試験かもしれんな』

書状を届けるという任務が最低限で、命じられた以上のことができるかどうか試しているのかもしれない。

「俺が今後使えるかどうかを見ているということか……」

『仕方なからう、一つのことにくつもの意味合いを持たせるのは、上に立つ者にとって大事な能力じゃ。それだけ期待されていると思えばよい。恐らくあの王女が今もつとも欲しいのは、信頼できる有能な配下、もしくは協力者なのだから』

カイルの声に多少不満の響きがあったからだろう、シルドニアが少しばかりフォローをいれる。

魔法生命体のシルドニアの元になったのは、千年前に滅んだ古代魔法王国ザールズの『魔法王』だ。

カイル達の中で一番ミレーナ王女に近いメンタリティを持つシルドニアには、彼女の気持ちと立場が理解できるのだ。

「別に不快には思わないよ、むしろカランとガルガン帝国との関係を説明した上、受諾するか否かの選択権まで与えてくれたんだ、ありがたいぐらいだ」

そう言うとカイルは立ち上がり、ドアへと向かう。

『どこへ行く？』

「トイレ、お前も早く寝ろよ」

宮殿の客ということで、部屋の外では世話係の侍女が不寝番ふしんぱんをしており、トイレまで案内してもらう。

既に時刻は深夜に近い時間帯。しかし宮殿内の通路は常に明るく保たれていた。中庭側の大きな窓ガラスは、恐らく昼間なら庭の見事な造りを映し、通る者の目を楽しませただろう。

何とはなしにそちらを見ながら部屋へ戻る途中、正面から複数の人が歩いてきた。それが侍女と護衛の騎士を連れたミレーナ王女だとわかると、カイルはすぐに通路の端により、頭を下げて道を空けた。

こんな遅くに時間をとらせる訳にもいかないと、簡単な挨拶だけですぐに立ち去ろうとしたカイルだったが、その背にミレーナ王女の声がかかる。

「あの、このような時間に非常識とはわかっておりますが、ほんの少しだけ……気晴らしに付き合っ
てはいただけませんか？」

その声にはどこか、寂しいような悲しいような響きが微かに混じっていた。

3

次期女王のお誘いを断る訳にも行かず、ミレーナ王女に連れられたカイルが着いた先は、宮殿の中庭だった。

中庭といっても大宮殿の中庭だ。ちょっとした公園並みの広さがある。

「ここは私のお気に入りの場所です」

その中庭の奥まった場所で、ミレーナ王女が辺りを見回しながら言う。

そこは周囲より小高い場所になっており、宮殿付きの庭師の手で整備された草花に囲まれていた。日中なら、緑の芸術といていいほどの見事な庭園が見渡せただろう。

だが【ライト】の魔法が込められた魔道具マジックアイテムによって、闇の中に色とりどりの花が浮かび上がるその光景も、昼の庭園にはない独特の美しさがある。

季節は七の月。まさに本格的な夏に入ったところだが、この時間帯は涼しくて過ごしやすい。時折吹く心地よい風が、ミレーナ王女の長い髪を軽く揺らす。

「ただ、このところは、そんなゆっくりとした時間はとれませんでしたけど」

軽くため息をつくミレーナ王女の横顔には、昼間と同じように陰りが見えた。

実際疲れているのだろう。この短期間に血の繋がった父と兄を失い、その肩にはこれからジルグスという国そのものがのしかかってくる。

いくら才気溢れる若い王女でも、精神的な重圧には耐えがたいこともあるのだろう。

傍らに立ったカイルは、そんなミレーナ王女に声をかけることができなかった。

彼女を慰める資格など無い。彼女を今の立場にしたのは、間違いなくカイル自身だからだ。

もちろんカイルがいなければ、彼女は今生きてすらいなかったのだが、カイルがその状況を自分のために利用している以上、言い訳にはならない。

その無言をどうとったのか、ミレーナ王女は少しだけ自嘲を含んだ笑みを浮かべる。

「情の薄い女とお思いですか？ 親族を失ったばかりだというのに、嘆きもしないことを」

「それは……」

「もちろん悲しみはあります。ただどこか他人事のように感じてしまっているのです。何より悲しんでいる時間がありませんので……今の私を見たら、お父様はどれほど嘆かれるでしょうか……」

「……陛下はこの国のことを誰よりも想うご立派な方でした。自分の死に必要以上にとらわれず、ジルグスのためにひたすら働く今のミレーナ様をご覧になれば、必ずや喜ばれたでしょう」

そう言いながら口がどうにかかなりそうな気分のカイルだったが、それを一切顔に出さず、あくま

で真剣な顔を貫く。

これぐらいの腹芸なら、カイルにもできるのだ。

そんなカイルの内心に気付かないミレーナ王女が礼を言う。

「ありがとうございます……ごめんなさい、貴方ならそう言って下さると思っていました。いえ、誰かにそう言っただけだったのかもしれないですね」

気が楽になりましたと、ミレーナ王女は少しだけ声を明るくする。

「今の立場に不満があるのですか？」

分をわきまえない問いであり、もし肯定されたとしてもどうしようもないことは、カイルにもわかっていた。

だが暗殺騒動の最中でも失われることのなかった、彼女だけが持つあの輝きに陰りが見えたことで、そう言わずにはいられなかったのだ。

「女王になるということに不満はありません……私はジルグスの女王になるために生まれ、女王として生き、女王のまま死にます。それ以外の生き方はできません」

「それは、不自由かもしれませんがね」

「他の人から見ればそうかもしれませんが。でも私自身はその人生に不満はありません。ただ、本当に私でいいのか、と不安になることはあります」

カイルの目から見ればこれほど女王に相応しい人物もいないのだが、当人は急な王位の継承に少なからず迷いを感じているようだった。

継承の重圧など、カイルには到底理解できない。それ故、ある人物の言葉を借りることにする。「……百の人間の利益を守るために十の人に不利益を強いる。千人の町を飢餓から救うために百人の村を見捨てる。万の軍を勝利に導くために千の兵に死ねと命じる。王にはこれらを躊躇いなく決断する覚悟が必要になる」

カイルの言葉に目を丸くするミレーナ王女。

「……それはカイル様のお考えですか？」

「いえ、私の知る限り、最も人々の上に立つに相応しい人物が言っていた言葉を借りました。上に立つ者が迷ってはいけないとのことだそうです」

あの『大侵攻』の中、王族や貴族といった様々な支配階級にカイルは出会った。そして混乱の最中とはいえ、そのほとんどがろくでもない連中だった。

これはその中で、唯一尊敬できた人物の言葉だ。

カイル自身も戦いの中で助けられる者と助けられない者を、時に非情に選んだ。

全ての人を救うなど、夢物語でしかない。カイルにはそれがよくわかっていた。

「確かに仰る通りですね、迷う訳にはいきません。私の迷いは国そのものの迷いとなりますからね」

「ただミレーナ様には、切り捨てられていく者を忘れず、一方でそういった者を一人でも減らすよう努めていただきたく願います……申し訳ありません、出すぎたことを言いました」

カイルは大きく頭を下げる。明らかに分不相応な発言だからだ。

だがミレーナ王女は嬉しそうに言った。

「そのようなことはありません。そのお言葉、ありがたく思います」

労わりどころか更に期待と重圧をかけてしまったかな、と考えていたカイルだったが、彼女の嬉しそうな顔に少し気が楽になった。

その後は王女も調子をとり戻したのか、明るい調子で二、三雑談をした後、昼の依頼の話になった。「婚姻はいずれ誰かと結ばなければなりません、今のところするつもりはありません。マイザー殿下には申し訳ありませんが、今帝国と繋がりを持つ必要はありませんので」

他のことならともかく、婚姻には慎重にならざるをえませんとミレーナ王女。

「確かに大事な問題でしょうからね」

「ええ、女王に離婚は許されません。例外があるとすれば死別くらい。つまり一回しか結婚できないのですから、慎重に相手を選ばなければなりません。結婚という切り札を、こんなことで使いたくありませんから」

「随分と他人事のように言うんですね、一生の問題だと思うのですが」

「あら、私からすれば、結婚に憧れや期待を持つことのほうが理解できません……いえ、考えたことが無いと言わなければならないか」

彼女は、完全に自分の婚姻を、政治上の手段の一つとしているようだ。

「もし恋愛というものがしたくなりましたら、愛人でも作りますので問題ありません」

「いやそれどころかと」

「相手は、そうですね……たとえば私の命が危険な時に颯爽と現れてくれて、それでいて何か秘密を持っている謎めいた方……そんな人には少し興味がありますね」

そう言ったミレーナ王女は身体ごと振り返り、これまで決して自分の前に出なかったカイルに、軽く詰め寄る。

互いの息がかかるのではないかという、人の目があつたなら絶対にここまで近づけないほどの距離。だがここは深夜の中庭で、側付きも全て下がっている。

近隣諸国にまで知れわたる美姫の顔を間近に見て、カイルの心音が跳ね上がる。

全身を硬くするカイルだったが、その反応を見たミレーナ王女は軽く笑う。

「冗談です。ただ本当にカイル様に興味を持っていますし、気に入っているのは間違いないかもしれません。カイル様には、私が今までに会った人には無い何かを感じますので」

これでも人を見る目はあるつもりです、とミレーナ王女は笑いながらカイルから離れる。

「お付き合いありがとうございます、それではお休みなさいませ」

ミレーナ王女は軽く頭を下げた後、カイルに背を向けて宮殿内へと歩き出す。

「……も、弄ばれた？」

もしかして自分をからかって気分転換をしたかっただけなのではと、ミレーナ王女の後ろ姿を見送りながら、カイルは引きつった笑いを浮かべた。

ミレーナ王女が宮殿内に戻ると、待たせていた侍女達が迎えた。その中で一番年少の侍女、二ノスが話しかける。

「お疲れ様でした。手応えはいかがでしたか？」

二ノスは側仕えの侍女達の中でも、特にミレーナ王女のお気に入りだ。

年はまだ十一だが頭の回転が速く、非常に深い知識を持っており、更には上級魔法をも扱える『魔道士』でもある、いわば天才児だった。

物静かでいつも冷静な判断を下し、様々な面でミレーナ王女を上手く補佐していた。

「あら、何のことかしら？」

「男心を手玉に取る練習台にするおつもりだったのでしょ？」

「そこだけ聞くと、私がとてつもない悪女に聞こえるわね」

ミレーナ王女は軽く笑うが、否定はしない。

カイルにも言った通り、結婚はいずれしなければならぬ。女王として、子供を生むのは仕事であり義務だからだ。

もちろん気に入る相手を迎えられればそれに越したことは無いのだが、あまり期待しないほうがいい。

そして王配といえど、自分のやることに口出しさせるつもりは一切無かった。

だが、だからと言ってわざわざ不幸な家庭を築きたいと思っている訳でもない。どんな相手であれ、自分の望むようにコントロールできれば問題ないのだ。

お茶会や晩餐会^{ばんさんかい}で、経験豊かな貴族のご婦人方から、さりげなくそのための情報収集はしていたのだが、聞きかじった技術はやはり実際に試してみないことには話にならない。

今までは国王の手前、特定の男に近づくことができなかった。それにも王宮の関係者で試したりすれば、後々面倒なことになる。

だが国内の最高権力者となった今なら、多少のことは揉み消せる。とりあえず手始めに、政治的なしごみが絡んでいないカイルに目をつけたのだ。

「弱みを見せるというのは有効だと聞いていたのですが、確かに効果がありましたわね。まあこれ

はカイル様の根が優しい方だからでしょうが、その後の反応も悪くないと見えましたけど……」

そう言うミレーナ王女の顔に、今日カイル達に見せていた陰りは無い。肉体的な疲れはともかく、精神的疲労はすっかり消え去っていた。

「ただ心理的な壁を感じましたわね、どこか一步引いているような感じだったわ」

「それは当然では？ ミレーナ様に気安く接することができる者など、このジルグスにはいないかと」

「身分差だけではなく、もっと別なもののような気もしましたけど……まあ男心^{おんしん}云々はあくまでついことです。それよりも収獲^{しゆく}だったのは、彼の人柄の部分に踏み入ることができたこと。今回の依頼がいい試金石になってくれるでしょう……やはり完全に手元に引き込みたい方ですね」

「私は反対です。あの男は得^え体が知^しれません」

ニノスははっきりと反対の意思を示した。

確かに彼らの実力は飛び抜けている。たった五名で近衛騎士一隊に匹敵するほどの力だから。

だが権力に対する執着は見受けられず、大貴族でも敵わないほどの財力を持っていて、しかも出所は不明のままだ。

その一方で名誉には執着し、自らの名声を高めることに貪欲なようでもある。

とにかく行動原理がちぐはぐで、何が本当の目的かわからない。ニノスにとってカイルは、理解

できない存在だった。

理解できないとはつまり行動が読めないということで、そんな不安要素を王女に近寄せたくな
いのだ。

もっとも王女も反対されるのはある程度予想しており、二ノスの態度に不満はなかった。

国の運営には一切の疑問を挟まず、自分を捨てて主命に従う者も必要だが、二ノスのように主君
にはつきりと反対の意思を言える者も大事なのだ。

その点はカイルも同じで、真正面から助言を与えられるという、今までにあまり経験の無いこと
をされ、却^{かえ}って好感を抱いていた。

「何かを隠しているというのはわかっています。でもそれを差し引いたとしても価値はあると思
います」

「随分と気に入っておられるようですが、なぜそこまで確信できるのです？」

「そうね、強いて言えば……勘かしら？」

ミレーナ王女の言葉に、二ノスは目を丸くする。

勘などという言葉を、今までミレーナ王女の口から聞いたことが無かったからだ。

いつも無表情の侍女のそんな顔に満足したように笑うと、ミレーナ王女は今度こそ本当に休むべ
く、寝室へと歩き始めた。

翌早朝、カイル達は依頼を受けることを姫の従僕に告げ、書状や連絡事項、身分を証明する証な
どを受け取った後、宮殿を出発した。

4

カイル達は宮殿を出た足でそのまま、武具店に来ていた。修理を終えた武具の受け取りや消耗品
の補充のためである。

「いらつしゃいませ」

来店したカイル達を、店の外まで出てきた店主のフェスバが、深々と頭を下げて出迎えた。

「それから遅ればせながら、授章おめでとうございます」

「ああ、ありがとう。あまり話題にはなっていないけどね」

カイルが首をすくめると、フェスバも多少苦い笑いを見せながら言う。

「それは少々時期が悪かったとしか……しかしカイル様達でしたら、すぐにでも新たなお手柄を立
てられるでしょう」

にこやかに話しかけるフェスバ。社交辞令だろうが、見る者に好感を与える笑顔だ。実際、フェスバにとってカイル達は非常に大切な上客だ。

今回の修理も本来はもう少し時間がかかったのだが、かなり無理をして大急ぎで行っている。無理を通すにはそれだけ費用がかかるものだが、その分の手間賃てまけんに加え、更に大量の魔法薬や魔石の注文を受けているのだから、その儲けたるや莫大なものになっている。

そしてカイルはそれらを全て前金で払っていた。これほど金払いのいい客には愛想あいそうがよくなるのも、商人なら当然だろう。

無論フェスバも、カイルの正体が気にならない訳ではない。

これまでまったくの無名だったというのに、途方もない資金力を持ち、王女の危機を救い、勲章まで授かっているのだ。

まるで吟遊詩人の詠う英雄譚うしやうだんの出だしのような活躍ぶりに、好奇心が疼くうずのも仕方がないと言えよう。

「それでは早速修理やご注文の品をお渡ししますので、こちらへどうぞ」

だが客の素性をみだりに探る者は、商売人として失格だ。

今は儲けさせてもらっているだけで充分、この繋がりを大事にすべきと、フェスバは客の中でも特別な相手に対応するときに使う部屋がある二階へと案内する。

カイルは修理されたレザーアーマーを受け取ると、試着して感触を確かめる。

ウルザやリーゼも魔法薬や魔石の種類や数を確認している。一方、シルドニアは出されたお菓子を機嫌よく食べていた。

「で、俺の剣はどうかな」

セランが修理に出していた剣を取り、刀身を確認する。

「はい、細かな傷がありましたか、修復可能な範囲でした。直した職人は、まるで何年も使い込んだ後のようだとしておりました」

使用して一月経っていないと伝えたら目を丸くしたものです、とフェスバが笑う。

「まあちよいと酷使したかもな」

さすがに重装備の近衛騎士を三十人ほど、しかも鎧ごと斬ったとは言えなかった。

「それでこの剣も悪くないんだけど、もうちよつといい剣ないか？」

「申し訳ありません、当店で扱っております剣としましては、これが最高クラスでして……」

フェスバが本当に申し訳なさそうにセランに言う。

もっといい剣はないか——これはフェスバがそれこそ日常的に客から投げかけられる言葉だ。己の腕に似合わない武器を手に入れても、振り回されるだけだというのに。

商人ゆえそういった客であっても、金さえ出されれば売りはする。が、その度に分不相応という言葉が頭の中でちらつく。

だが物は、商品は嘘をつかない。

セランの剣の傷み具合からは、持ち主の力量についていけないというのがはつきりと伝わってきた。

とはいえフェスバにこれ以上の剣を用意するのは難しい。フェスバは客が本当に求めているものを用意できない商人としての力不足を、心から詫びたのだ。

「そうか……じゃあ当分はこいつで何とかするか」

しゃあないかとセランは剣を鞘に収める。

この店で最高品質ということはつまり、金で手に入る品としてはこれ以上のものは中々ないのだと、セランにもわかっていった。

並の剣ならあの戦いの途中で折れるなり曲がるなりしていただろうが、ちゃんと最後まで持ったのだ。間違っても悪い剣とは言えない。

だが仮に、セランがシルドニアと同等の剣を持っていればもつと楽に戦えたのもまた事実だった。

「恐れ入ります……お約束はできませんが、あらゆる伝手^{つて}をたどってセラン様に相応^{ふさわ}しい剣を探し、仕入れさせていただきますので」

「期待しないで待ってるよ」

セランが剣を腰に差しながら言った。

「これからカランに行くのだけど、何かあそこについて知っていることは無いかな？」

全ての受け取りと確認が終わった後、カイルがフェスバに質問する。

カイルは前の人生でも、カランに行ったことがない。機会があれば一度くらいは行ってみたいとは思っていたのだが、その前にあの大侵攻が起こってしまった。

カランは良質な武具を生産しており、この店でもカラン製の武具は扱っている。ならば多少なりと知っているはずと期待を込める。

「カランについてでございますか。あそこは……少々難しい場所と言えます。古い歴史を持ち、閉鎖的で、あまり外と関わらないのが伝統でした」

カランと聞いて少しだけ顔が曇^{くも}ったフェスバは、ここだけの話ですがと続ける。

「カランの実質的な支配者は鍛冶ギルドで、そのギルド長が都市長も兼任しております。鍛冶ギルドの者は大抵が、良く言えば己の腕に自信を持って自尊心が高く、悪く言えば他を見下して傲慢^{ごうまん}ともとれる態度で……幾度も問題を起こしております」

数年前までは都市に入ることすら大変で、商売には苦勞しました、とフェスバが苦笑する。

「たださすがにジルグスの従属都市国家となつてからは変わらざるを得なかったようですね。それまでの風習も変えようとしているのでしよう、今は若い世代を中心に外との交わりを、特にジルグスとの交流を増やしているようです」

良い方向に変わりつつあります、とフェスバ。

「なるほど……ありがとう。また来ると思うが、その時もよろしく頼む」

カイルは礼を言つて店から出ようとし、リーゼ達もそれに続く。

「ああ、それから」

店を出ようとするセランを、フェスバが呼び止めた。

「カランは古い歴史とその土地柄故、武具に関する逸話も多くあります。もしかしたらセラン様に相応しい剣があるかもしれません」

「ふむ……初めて行つた街ではまず可愛い女の子を探すんだが、ここは少しばかり信念を曲げて剣探しをするか……」

セランが真面目な顔でくだらないことを呟くが、ふと気づいたようにフェスバに聞いた。

「でもいいのかい、俺が他の場所で剣を手に入れても？ 仕入れが無駄になるんじゃない？」

「それは私に商売運が無かつたということです。その時はまた別のところで儲けさせていただきますので」

皆様のカランでの幸運をお祈りいたします、とフェスバは笑顔で見送った。



マラッドを旅立つて二日後、カランがもうすぐ見えるというところまでカイル達は来ていた。

通常ならこの数倍の日数がかかるが、ウルザの魔法【ウィンド・ウォーカー】のおかげでかなり短縮できた。

「あれがカランか……噂通りの都市だな」

遠目に見えてきたカランの前に、ウルザが呆れとも感心ともとれる声をあげる。

この辺り一帯は地平線が見えるほどの広大な平原なのだが、その視線の先に突如として山が現れたのだ。

上部に万年雪が積もり、山頂は雲をも突き抜ける巨大な山で、その中腹部を直角に切り取って段差を作つたような場所に、都市国家カランはあった。

切り立つた山肌を背にし、見上げるような城壁で囲まれた、まさに城塞と言える都市だった。

山の中腹ではあるが、正面の門から続く街道は盛り上がった峰状に続いている。それはふもとを越えたはるか先で緩やかな坂道となり、そこを荷馬車が何台も通っていた。出入りもそこまで不便

そうではない。

「山間にあるって聞いていたが、完全に山の真ん中、いや山と一体化してるな、ありゃ」

セランも呆れたような声を出す。

「どうやって山の真ん中に都市なんて作ったんだろ」

見れば見るほど奇妙で異様な都市に、リーゼが心底不思議そうに言う。

「ああ逆じゃ逆。山の中に都市を作ったのではなく、都市があつたところに山を作ったのじゃ」

呆気にとられている皆に、シルドニアが何でもないとのように説明する。

「山を……作ったあ!？」

リーゼは思わずシルドニアとカランを交互に見る。

「うむ、そもそもこのような平原にあんな巨大な山が一つだけあるというのは不自然じゃろ？」

元々あの都市はザーレスの時代に、魔族に対する前線基地として作られたのじゃが、同時にとある大規模魔法実験が行われたのじゃよ」

「それがあの山？」

「そうじゃ。この一帯の地中には、良質の鉱脈がいくつもあるのがわかっておったのじゃが、深すぎて中々手が出せなかった。そこで地形を変動させ、地下深くの鉱脈を集めて地上に押し出した。つまりあの山そのものが、良質の鉱脈の塊のようなもののじゃ」

千年以上経っても掘り尽くせぬほどとは予想外であつたな、とシルドニアが笑う。

「昔の魔法って……凄かったのねえ」

「村の長老から、その昔には地形すら変えてしまう大魔法があつたと聞いたことはあるが……本当だったとはな」

リーゼとウルザが天を衝くかのような山を見て、同じように呆れながら言った。

「で、鉱脈を集めると同時に攻め込まれにくくなるから防御力も上がって一石二鳥か……しかし、その守りに適している都市を攻め落とす寸前まで持っていくガルガン帝国ってのは凄まじいな」

セランの感想は皆と少し違っていた。

カランを少し見ただけでも、難攻不落だとわかる者にはわかる。

大軍を展開するには街道が狭すぎて、数の優位はそれほど役に立たない。また大型の攻城兵器も使えない。

当然都市内には兵糧も年単位分を準備してあるだろうし、むしろ数が多ければ多いほど攻め手の兵糧は早く尽きるだろう。

「もちろんそれはいくつも理由があるさ。単純な戦力差もあるし、帝国には少数精鋭の隊も多く、大魔道士も投入しようだしな。あとは帝国が特殊な部隊をいくつも抱えているのが大きい」

ガルガン帝国について詳しいカイルが説明する。



「特殊ってどういう……って何だあれ？」

山の背後からカランへと向かって飛んでくる影をセランが見つける。

形は鳥に似ているが、それにしては大きい。そんな何かが何匹も群れをなして東の方角から飛んできている。

「あれは……もしかしてワイバーン？」

目の良いリーゼが正体を見抜く。

ワイバーン、それは飛竜とも言われるドラゴンの亜種たる魔獣だ。

ドラゴンと違って知能は低く、戦闘能力も遠く及ばない。だが飛行能力は高く、空を飛ぶ魔獣の代表格だ。

「人が乗っているな……そしてあれは確かガルガン帝国の紋章だ」

ウルザの言う通り、何頭かのワイバーンの背には、盾に絡みつく黄金の蛇の紋章が入った旗が見える。

それは間違いなくガルガン帝国の紋章だ。そしてその背に人が乗っているのも確認できた。

「……帝国が誇る飛竜騎士団だな。ワイバーンに騎乗している集団なんて、あいつら以外にいない」
カイルもまた空を見上げ、眉をひそめる。

「ワイバーンを飼い慣らすとは大したものだな」

シルドニアが感心したように言う。

魔獣を騎馬代わりにするというのは珍しいことではないが、ワイバーンは通常の魔獣に比べても更に気性が荒く、人に慣れることはまず無かった。

稀にワイバーンに騎乗する冒険者もいるが、それは特殊な例外でしかなく、軍に利用するというのは今まで不可能とされていた。

だがそれを技術として確立したのがガルガン帝国である。彼らはワイバーンを軍で機能する戦力として組み込むことにまで成功していた。

その機動力たるや通常の騎兵をはるかに超え、編隊を組んだ上空からの攻撃の前には、通常の竈城は役に立たない。これこそ、短期間で勢力を伸ばした帝国の強さの理由の一つだった。

「あれが今言っていた特殊な部隊の一つってやつか？」

セランの問いにカイルが頷く。

「なるほどねえ……で、問題はその帝国が誇る飛竜なんたらがこのタイミングで何しに來たかってことだな」

ワイバーンがカラン都市内に入っていくのを見ながら、セランはカイルに、どう思う？ と聞く。

「……俺達の目的と無関係だといいなあ、と希望的観測を言っておこう」

カイルはため息と共に呟くように言った後、気を取り直してカランへと歩を進めた。

5

カランの正門の前に、他国の商人と思しき馬車の列が並ぶ。彼らがカランに入る手続きをしているのを横目に、カイル達はすんなりと門を通る。

「早速、使者の立場が役に立ったな」

あの混み具合では、通常なら都市に入る手続きに相当時間がかかっただろうが、今のカイル達はこの一件が終わるまではジルグス国を代表する正式な使者として、その身分を保証されている。

このカランにおいて、ジルグスはほとんど支配国と言える。現に門の役人など、カイル達がジルグスの使者と知ると、すつ飛んで連絡に行ったぐらいだ。

カランは独特の雰囲気を持った町並みだった。建物は全て石造りの無骨な造り。マラッドのように見た目にもこだわる様子はなく、質実剛健といった趣だ。

セランやシルドニアも珍しげに町並みを見ている。

だがウルザだけは不機嫌そうに、この街に入った途端フードを目深に被ってその特徴的な耳が見えないようにしていた。